

# 木のお守り 蘇民将来

— 渡来民の痕跡 —



早大応化会中部支部 2012-03-01

名古屋ダイヤビル1号館 3階131号室

# 上田国分寺 —蘇民将来との遭遇—

蘇我氏？

大化の改新(645)  
で没落した帰化人  
の救済宣言？

長大人子将蘇  
者福也孫来民

中央アジア(蒙古)  
のパオを思わせる



蘇民将来符  
47社



京都 八坂神社 — 祇園祭



尾張 津島神社 — 津島(天王)祭



米沢 笹野観音



入間 竹寺



# 水沢 黒石寺 一 蘇民祭(裸祭)



# 蘇民将来信仰



## 最古の蘇民将来符

長岡京(784-794)跡の側溝から見つかった。(2001-4-19)  
27 mm(縦) × 13 mm(横) × 2 mm(厚)

中央上部に穴があげられており、紐を通して腰や首にぶら下げて使ったらしい。

したがって、蘇民将来信仰は民間信仰として古くから行われていたことがわかる。

1,400年間の  
時間の分厚い  
大気を通して見  
ている。

牛頭天王  
(ごずてんのう)

風土記: 8世紀  
はじめ  
釈日本紀 (13  
世紀)に収録

備後國 蘇民将来 備後國の風土記に曰はく、疫隅の國社 昔、北の海に坐しし武塔の神、南の海の神の女子をよばひに出でまししに、日暮れぬ。彼の所に将来二人ありき。兄の蘇民将来は甚く貧窮しく、弟の将来は富饒みて、屋倉一百ありき。爰に、武塔の神、宿處を借りたまふに、惜みて借さず、兄の蘇民将来、借し奉りき。即ち、粟柄を以ちて座と為し、粟飯等を以ちて饗へ奉りき。爰に畢へて出でませる後に、年を経て、八柱のみ子を率て還り来て詔りたまひしく、「我、将来に報答為む。汝が子孫其の家に入りや」と問ひたまひき。蘇民将来、答へて申ししく、「己が女子と斯の婦と侍ふ」と申しき。即ち詔りたまひしく、「茅の輪を以ちて、腰の上に着けしめよ」とのりたまひき。詔の隨に着けしむるに、即夜に蘇民の女子一人を置きて、皆悉にころしほろぼしてき。即ち、詔りたまひしく、「吾は速須佐雄の神なり。後の世に疫氣あらば、汝、蘇民将来の子孫と云ひて、茅の輪を以ちて腰に着けたる人は免れなむ」と詔りたまひき。

婆利采女

備後國

蘇民将来

コタン将来

広峰神社

八坂神社

祇園社  
本家争い

Korea

Japan

# 疫隅国社→八坂神社

福山市新市町 素盞鳴(スサノオ)神社 の摂社「蘇民神社」= 疫隅国社(エノクマ)



姫路 広峰神社(牛頭天王総本宮) 地養社(蘇民将来を祭る)  
広峰・祇園・津島 : 日本三大天王



北白河 東光寺(現 岡崎神社)



京都八坂 栗田神社



京都八坂 祇園社 あるいは 祇園感神院



明治以後改め 京都八坂 八坂神社

---

川村湊,「牛頭天王と蘇民将来伝説」作品社、2008読売文学賞



# 神仏分離令 1868

- 権現(本地垂迹説で、仏教神が仮に神の姿で現れた)  
八幡権現(八幡菩薩) → 八幡大神 でOK

- 牛頭天王

異神を認めず(神は日本本来のものである)

天皇の名を僭称する不敬の偽神

(1) 祇園社 → 八坂神社、牛頭天王社 → 津島神社 と改名し、さらに

(2) 祭神 牛頭天王 → スサノオノミコト と改め

(3) 神宮寺を廃絶、あるいは分離し、仏教的なものを除去(廃仏毀釈)

・神社の仏教に対する報復

石清水八幡宮: 仏像等を古物商に売り飛ばす

日吉神社: 仏像等を破壊、廃棄

興福寺: 僧侶が全員還俗して春日大社の神官になってしまい、管理者がいなくなった。五重塔を買った商人が金具類を取ろうとして焼き払おうとしたが類焼を恐れた近隣の反対で思いとどまった。

一、中古以来、某権現ボウゴンゲン或ハ牛頭天王ウシノコウテンノウ之類、其外仏語ヲ以神号ニ相称アイトナエソウクロウ候神社不少スクナカラズソウクロウ候、何レモ其  
神社之由緒委細ニ書付、早々早可申出給候事、但勅祭之神社御翰等有之候向ハ、是又可伺出其上ニ  
テ御沙汰可有之候、其余之社ハ、裁判、鎮台、領主支配頭等へ可申出候事  
一、仏像ヲ以神体ト致候神社ハ、以来相改可申候事  
附本地抔ト唱へ仏像ヲ社前ニ掛、或ハ、鰐口、梵鐘、仏具等置候分ハ、早々取除キ可申事  
右之通被仰出候事

# ひの歴史歳時記

## 牛頭天王社を改称

日野宿鎮守の牛頭天王社（すてんのうじや）が新しく八坂神社と名を替えた。幕府が瓦解（がかい）して間もない明治2年（1869年）2月のことである。

天王社といえは歴史は古い。社伝では応安5年（1372年）の創建（東京府南多摩郡日野町神社取調書）八坂神社所蔵文書」というから、室町時代のことになる。現在、神明造りの堂々とした覆殿（ふくでん）と広い境内の巨木が歴史の古さを語りかけている。

## 神仏分離令

八坂神社改称の背景には、慶応4年（1868年）に公布された神仏分離令があった。

明治維新の当時、日本には多数の神社が存在していた。

神社神道は長い歴史の中で仏教などと融合し、仏教に從順する立場におかれていた。神道の国教化を目指した維新政府は、神と仏をはっきりと分離して神道を確立し、同時にそれまで幕府と結んでいた仏教を無力化しようとした。

ところで日野宿の牛頭天王社は、普門寺が別当を勤めて取り仕切っていたが、神仏分離令が出ると、普門寺は神祇官（じんぎかん）御役所に「復飾願」を提出して事業の再開に努力した。

## 提出した復飾願

復飾とは遠俗（げんぞく）のことで、僧侶が髪を伸ばして俗人にかえることをいうが、ここでは神官になることをも意味している。普門寺住

職隆春（りゅうゆづ）は「復飾願」でこう述べている。

自分の弟子に土洲藏人（つちぶちぞうじん）という者がおり、また別髪（ていはつ）をしていないので神主にさせ、牛頭天王を八坂神社と稱替して「皇国古道」をもって鎮守として奉仕したい、このことは氏子一同・宿役人もなら障害はないといっている。ぜひ許可を与えてほしい、と。

## 晩秋の11月

晩秋11月のある日、普門寺の住職は檀家（だんか）総代・宿役総代と連名で、八坂神社に牛頭天王社時代の土地を引渡した。神官・土洲藏人はそれを受けて大切に守ることを誓った。これで普門寺の神仏分離はすべて完了した。

この年は冷害のため大凶作になり、飢饉（ききん）が広がっていた。明治2年の飢饉（こがらし）の時節である。世の動きをしつと見ていた普門寺の住職には、冬を告げる風が一段と身に染みたくない。運動が起こって寺は窮地に立たされていた。11月は風

# 八坂神社改称の背景



▲昭和の初めごろの八坂神社

（市史編集委員 沼 謙吉）







# 祇園祭

祇園祭の始まりは、疫病が流行した869年6月7日、災厄除去を祈るために行われた祇園御霊会(ごりょうえ)である。

7月13日～16日の宵山

17日朝から行われる山鉾巡行

**神幸祭(しんこうさい)**

山鉾巡行の日の夕刻から、八坂神社の3人の神が金の神輿に乗って神社を出発し、鴨川を渡り、京都市内を練り歩いたあと、四条通りの四条御旅所(おたびしょ)へやってくる。そして御旅所に1週間滞在し、京都の街から災厄を祓う。

中御座(六角形屋根)：**素戔鳴尊(スサノオノミコト)**

東御座(四角形屋根)：**櫛稲田姫命(クシイナダヒメノミコト)**

西御座(八角形屋根)：**八柱神子神(ヤハシラノミコガミ)**

**還幸祭(かんこうさい)**

花傘巡行の日の夕刻5時頃から、四条御旅所に滞在していた3人の神が、1週間の滞在を終え、八坂神社へ還っていく。

7月31日 疫神社夏越祓(**茅の輪くぐり**)



祇園

# 伊勢の蘇民将米

イザナギが禊を行うと様々な神が生まれ、最後に天照大神(あまてらす)・ツクヨミノミコト(月読命・つくよみ)・スサノオノミコト(建速須佐之男命・すさのを)の三貴が生まれた。イザナギは三貴子にそれぞれ高天原・夜・海原の統治を委任した。

伊勢神宮は天照大神を主祭神とし、皇室の祖廟であり、日本神話の中心である。その近くの二見浦に「蘇民の森」があり、松下社の遺跡がある。二見の町内の家々に「蘇民将来之子孫也」と書いた注連縄を正月ごとに飾る。これは蘇民将来信仰が極めて強く二見の住民の間に生きていることを示す。

三重県桑名郡二見町  
蘇民森 松下社



# 津島神社 (牛頭天王社)

神仏分離令のたたりを恐れてか、牛頭天王は徹底的にスサノヲノミコに変換され、隠蔽されている。

和御魂(にぎみたま)社 ← 蘇民社

居森社 ← スサノヲノミコの幸御魂(サキミタマ)  
← 牛頭天王が最初に来臨した聖地

荒御霊社 ← スサノヲノミコの荒御魂(アラミタマ) ← 蛇毒神社(牛頭天王八王子神の8番目の「蛇毒気神」を祀った神社)

八柱社 ← 宗像三女神+五男神 ← 牛頭天王八王子神を祀る

牛頭天王像 → 宝珠院興禅寺 (次ページ)



牛頭天王像

神仏分離のため  
宝珠院興禅寺  
に安置



# 尾張 津島天王祭

## 7月23日(土) 宵祭

みこしとぎょ  
**神輿渡御** 午前10時

宵祭、朝祭の船を御神輿の為、100メートルに及ぶ華麗な行列が続き、神輿が御旅所へ移動します。なお、この神輿が津島神社を出るのは、この天王祭の時だけです。



によいでんか  
**如意点火～提灯点火** 午後7時

太鼓が鳴り響くなか、まきわら船の真柱(まばしら)に点灯する12個の提灯を頼りあってあげたあと、各部分の提灯点火が進められます。

**出船** 午後8時45分

5艘のまきわら船がゆうゆうと漕ぎ進みます。



撮影：伊東弘典

## 7月24日(日) 朝祭

**屋台起こし**(市江車)

宵祭には参加せず、待機していた市江車では、早朝5時から屋台・人形を横に組んで、下からいっきに組み立てます。

**出船** 午前9時

市江車を先頭に6艘の車楽船が古楽を奏でながら、勇壮に漕ぎ進みます。

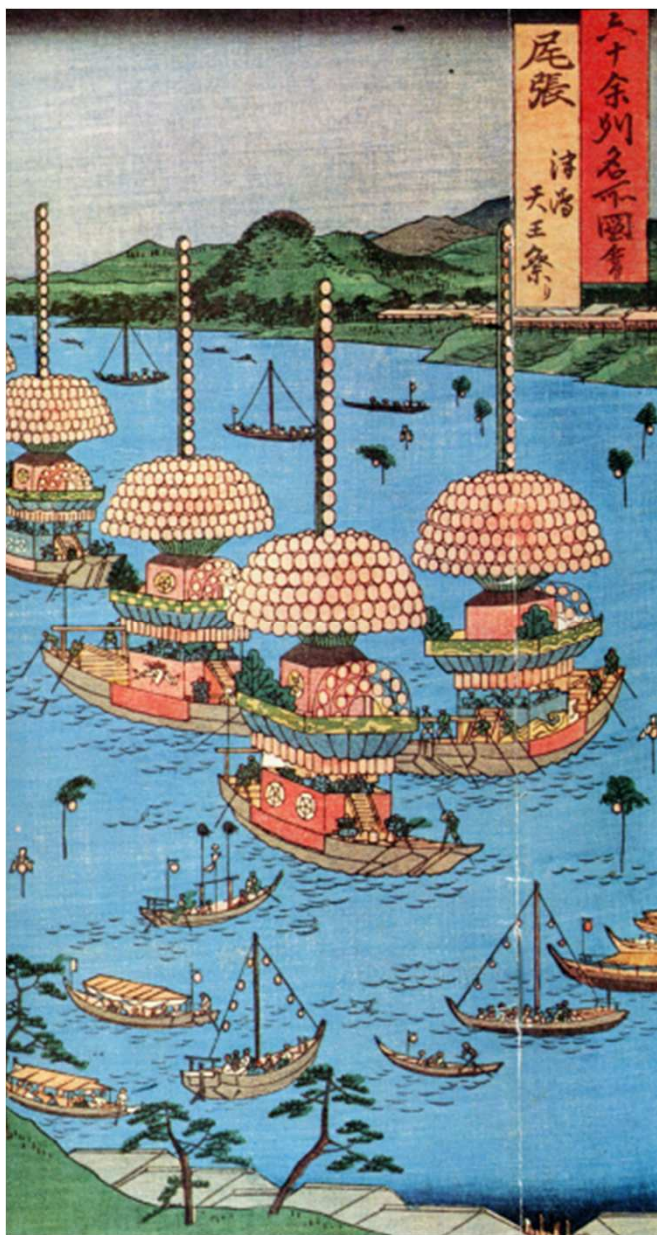
みこしかんざよ  
**神輿還御**

市江車、津島5車の稚児が御旅所に上陸し終わると還御祭が行われ、神輿は各車の稚児などの供奉のもとに神社御本殿に還御される。続いて拜殿では稚児による神前奏楽を奉納し、盃事が行われる。それが終わると各車帰途につき、朝祭が終わります。



時を超え無限の遺産を  
このまちに残した

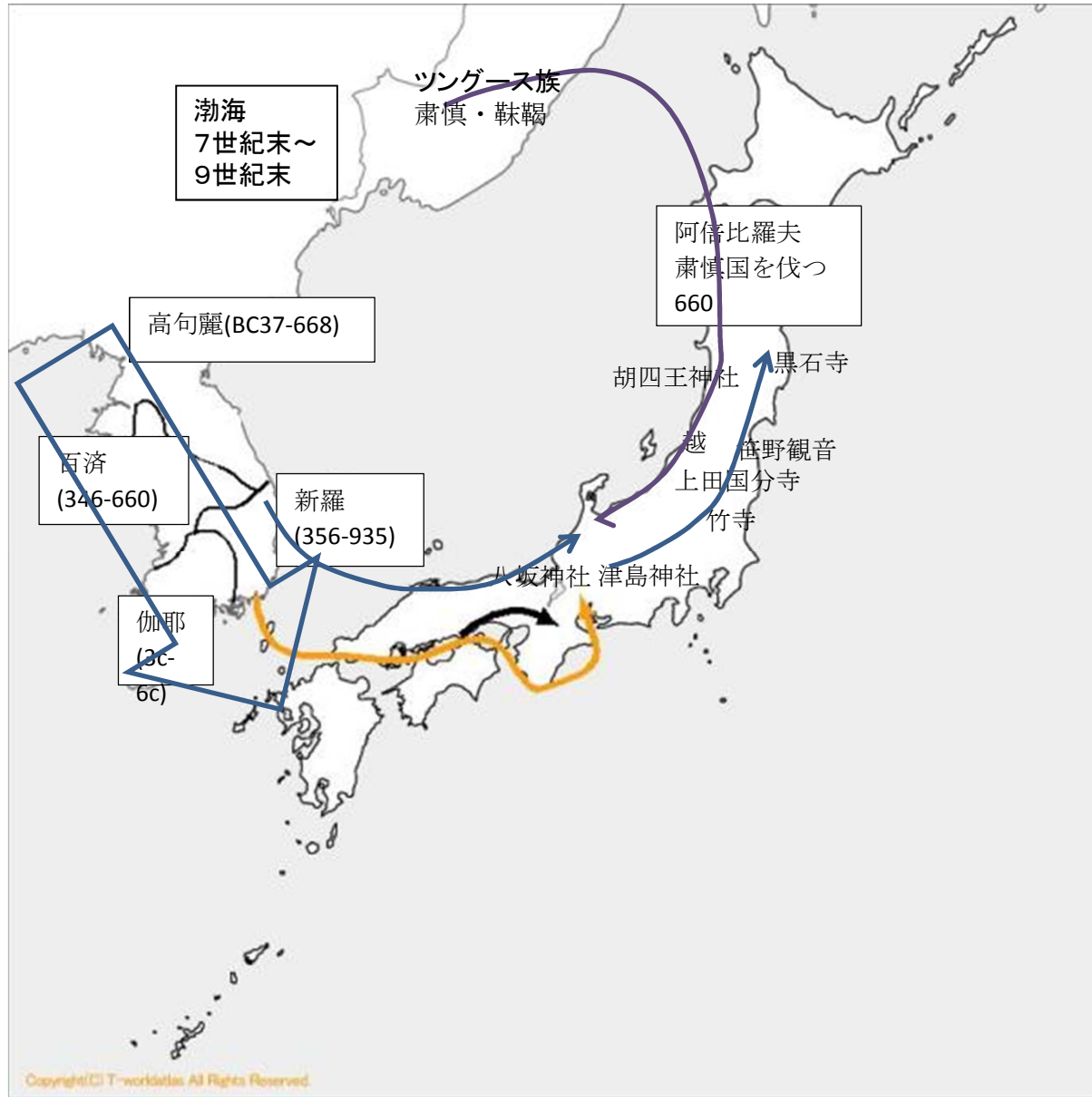




宵祭  
5隻のちょうちん船

1560 織田信長 天王祭を  
この橋より見物

陸： 八坂祇園祭  
水： 尾張天王祭



7世紀末、百濟、高句麗が新羅に破れ大量の難民が日本に押し寄せてきた。

一方、同時期大和朝廷は北へ侵攻。8世紀はじめ坂之上田村磨東征。難民は東へ送られたが、どのようなシステムで送られたのか。

# 渡来民の移動の痕跡

(1) 新羅系 Silla 白鬚神社・白山(しらやま)・新羅郡→新座(埼玉県)

宮城県柴田郡川崎町支倉(はせくら)はかつての「陸奥国柴田郡新羅郷」だ。支倉には新羅人の供養塔がある。

福井県敦賀市白木は新羅人の名からきた地名で、そこに「白城(しらぎ)神社」がある。福島県猪苗代町白木城(しらぎじょう)、鹿児島県大口市白木も新羅人ゆかりの地で「新羅神社」がある。

大阪市の住吉大社の神宮寺を「新羅寺」ということからすると、その付近に新羅人が居住地したことを思わせる。

(2) 高句麗系(大和では高麗と呼んでいた)

高麗(こま:埼玉県) 716 高句麗人1779人を、東国の七国に置く 同年武蔵国高麗郡設置

北巨摩郡(山梨県)・鹿児島県高麗町

東京都狛江(こまえ)市には、高句麗系とみられる「亀塚古墳」がある。駒井(東京)。

神奈川県大磯町高麗は花水川の右岸にあり、付近には「高来神社」がある。

相模一ノ宮のある「高座(こうざ・たかくら)郡」は高句麗系渡来人によって開拓された地である。

宮城県柴田郡川崎町支倉(はせくら)はかつての「陸奥国柴田郡新羅郷」。支倉には新羅人の供養塔がある。



### (3) 百済

奈良県広陵町百済には「百済寺」があり、集落は曾我川と葛城川に挟まれた条里制のしかれた水田地帯にある。

大阪市平野区から生野区あたりは古くから渡来人が住み、平野区の平野川に架かる橋を「百済橋」といい、旧平野川を「百済川」といった。

滋賀県東近江市には名刹の百済寺(ひやくさいじ)がある。熊本県の八代市久多良木には百済来川が流れ、百済来地蔵堂がある。

宮崎県美郷町の旧南郷村には「百済の里」がある。滅びた百済の王族が流れ着いた地であり、ゆかりの神社や古墳もあるということで、村おこしの一翼を担っている。

# 現状での観察結果

7世紀末の百済・高句麗滅亡による大量の難民が日本国内に散った。蘇民将来を奉じる民もその一部で、多分八坂社あるいは津島神社のネットワークで現地人との摩擦に耐えながら、関東から東北を開拓していったと考えられる。

ただ、特性としては、農業・漁業に適した平地あるいは海岸には定着せず、山に定着し、林業に従事したようである。木を扱うことに得意で、蘇民将来に象徴される木を用いたお守り、オタカポツポのようないろんな工芸品を生んでいる。平和を好み、争いを好まない人々であったように思われる。